

類似歌抽出に基づく歌集の成立年代推定

福田 智子[†] 竹田 正幸[†] 南里 一郎*

[†]福岡女学院大学 [†]九州大学大学院システム情報科学研究院 *純真女子短期大学

要旨. 本稿では、任意の歌集間から類似歌を抽出することで、ある歌集の成立年代の推定へとつながった事例を報告する。これまで鎌倉時代中期の成立ではないかと考えられていた『為忠集』と、平安最末期以降の私家集(個人歌集)との間で、網羅的に類似歌の抽出を行ったところ、室町時代に成立した、正徹の『草根集』に、まとまった数の類似歌が拾い出せた。さらに、正徹の弟子である桜井基佐の『基佐集』に、『為忠集』に載る歌と同一の歌が見いだせた。『為忠集』に現れる人物の考証も併せて行ったところ、『為忠集』の成立を15世紀と推定することができた。

Estimating Editing Date of Mysterious Anthology of Classical Japanese Poems : An Application of Automatic Extraction of Similar Poems

Tomoko Fukuda[†] Masayuki Takeda[†] Ichiro Nanri *

[†]Fukuoka Jo Gakuin College [†]Department of Informatics, Kyushu University

* Junshin Women's Junior College

Abstract. This paper reports an application of the method of automatically extracting similar poems we developed. We have compared Tametada-Shu, the mysterious anthology unidentified in Japanese literary history, with a number of private anthologies edited after the middle of the Kamakura period (the thirteenth-century) and found that there are several pairs of similar poems between Tametada-Shu and Sokon-Shu, an anthology by Shotetsu. The result suggests that the mysterious anthology was edited by a poet in the early Muromachi period (the fifteenth-century). There have been surmised dispute about the editing date since one scholar suggested the middle of Kamakura period as a probable one. We have had strong evidence about this problem.

1 はじめに

「梅に鶯」に象徴されるように、古典和歌に用いられることば(歌語)や、その組み合わせには、一定のきまりがある。従って、歌人たちは、新たな歌を生み出していく上で、この枠を自らの作歌の基礎としなければならない。それは仮に、多少その規制からはみ出すことになっても、である。既存の歌は、いわば作歌の教科書であった。だから、中には、ある特定の歌人の歌から、歌語の組み合わせや言い回しはおろか、1句から数句まるごと自分の歌に採る者も現れる。そういった、既存の歌から表現を採り入れる程度の甚だしい歌人

の場合、誰の、どの歌からその表現を採り入れたか、特定できることが多い。そして、それらを具体的に把握することは、ひとり古典和歌の表現授受の系譜をたどるにとどまらず、和歌文学研究における重要な問題、すなわち、歌集の成立年代推定の鍵となることもある。

2 成立年代未詳の歌集—『為忠集』—

その一例として、『為忠集』という私家集(個人歌集)を採り上げてみよう。この集は、当初、大原三寂の父である平安末期の歌人、丹後守為忠の

家集と紹介されていた*1。だが、井上宗雄氏は、

1. 『為忠集』に丹後守為忠の歌が1首もない。
2. 『為忠集』の歌が勅撰集・私撰集に採られていない。
3. 『為忠集』の詞書中の人物の伝がはっきりしない。

といった理由で、『為忠集』を丹後守為忠の集とするのに疑義を唱えた*2。

その後、『為忠集』所載歌に、『俊成卿女集』の歌をもとに作ったと思しきものが20首ほどまとめて見られることが、森本元子氏によって指摘された。以下、それらの用例の中から、3対を抜粋して示そう。

- (1) あはちがた/なみにうきねの/ながきよは/
つきにこころの/やどるなりけり
『為忠集』125番

きよみがた/うきねのなみに/やどるよは/
つきにこころの/とまるなりけり
『俊成卿女集』16番

- (2) ひとしれず/おもふころを/きみにさは
/おぼろにうつせ/はるのつきかけ
『為忠集』185番

うらめしや/おもふころを/かすめても
/おぼろにうつす/はるのつきかけ
『俊成卿女集』68番

- (3) ことづてん/あまのをぶねの/たよりも
/そなたのかたに/こがるわがみと
『為忠集』189番

しるべせよ/あまのをぶねの/たよりも
/そなたのかぜの/あとのしらなみ
『俊成卿女集』69番

(1)ではまず、初句が、「あはちがた」と「きよみがた」で、双方とも干瀉の名であり、続いて、「なみにうきねの」と「うきねのなみに」という、「なみに」と「うきねの」とが相前後した表現、そして、第3句の半ば以降は、「…よは/つきにこころ

の/…るなりけり」という共通部分列をもつ上に、『為忠集』歌の結句と、『俊成卿女集』歌の第3句には、ともに「やどる」とある。また(2)は、第2句の「おもふころを」が一致するのに加え、下の句が「おぼろにうつ…/はるのつきかけ」と、ほぼ同じである。さらに(3)では、「あまのをぶねの/たよりも/そなたのか…」というように、第2句から第4句にかけて全く一致する。こういった用例を踏まえ、森本氏は、『為忠集』が、『俊成卿女集』の成立以後に成った、鎌倉中期頃の歌人の集ではないかと推定した*3。この仮説が発表された当時としては、数ある私家集の中から、特に、これら二つの集に収載される和歌の類似表現を見出した点、脱帽に値しよう。管見によれば、この説が出てから現在に至るほぼ四半世紀の間、『為忠集』の成立について、新たな見解は提出されていないようである。

このように、森本氏の説は、現在まで、あたかも定説のごとく受け入れられてきた。がしかし、その考察過程には、ひとつの大きな落とし穴がある。すなわち、この推論が、あくまでも俊成卿女研究の一環としてなされたものであるという点である。『為忠集』の歌には、確かに、俊成卿女の歌を著しく模倣したものがある。ならば、その歌作りの傾向から推して、表現摂取の対象とされた歌人は、俊成卿女以外にもいるかもしれない。そして、もし仮に、『為忠集』中に、俊成卿女よりも後の歌人の歌をもとにして作った歌が存在するならば、その成立年代は、もっと引き下げられなければならないはずである。

3 網羅的な類似歌抽出

こうして、我々に課せられることになったのは、『為忠集』269首それぞれについて、特定の本歌(もとにした歌)が存在するかどうかを見極め、網羅的にそれらを収集するという作業である。これがいかに過酷なものであるかは、『為忠集』の歌一首一首と比較すべき古典和歌が、数万首に及ぶことをもって、想像していただきたい。これはもはや

*1 『和歌文学大事典』(明治書院、昭和37年11月)「為忠 丹後守」の項(久曾神昇氏)。

*2 「丹後守為忠をめぐって」(『文学・語学』13、昭和34年9月。後に『平安後期歌人伝の研究』(笠間叢書100、昭和53年10月)所収。

*3 『俊成卿女の研究』「第12章 為忠家集と俊成卿女」(桜楓社、昭和51年11月)。

や、『為忠集』歌の表現を1首ずつ検索していたのでは、埒が明かない。ならば、計算機(コンピュータ)によって、『為忠集』歌と任意の歌集の歌とを1首1首比較し、共通する文字列をもつ歌を自動抽出してみたらどうであろうか。つまり、これまで類似表現を検索するのに用いていた句索引(一首の和歌を5-7-5-7-7の5句に分割し、句頭の文字から五十音順に配列した索引)の代わりに、計算機を利用するのである。

我々が案出したのは、二つの歌集間において、共通する文字列をもつ歌を自動抽出し、その文字列の長さに応じた点数を付して序列化するという方法*4である。用いるデータは、『新編国歌大観』CD-ROM版(1996年)による。ここでは、歌集の原本に即し、漢字仮名交じりで表記された本文とともに、すべて平仮名表記にした句索引が収録されている。我々は、この句索引から、もとの歌を復元し、すべて平仮名表記の和歌データを作成した。従って、この和歌データには、5-7-5-7-7の区切れが明示されている。そこで、今回は、句ごとに共通文字列をカウントしていくことにした。

具体的には、まず、『為忠集』と、比較対象とすべき歌集から、1首ずつ歌を採り出し、『為忠集』歌の5句それぞれを、相手方の歌の5句すべてに対照させてみる。そして、句ごとに求めたスコアの総和がもっとも高くなるような対応付けを決定し、その値を類似度とする。句ごとのスコアの与え方としては、もっとも素朴には、一致する文字対の個数をそのままスコアとする方法が考えられる。これは最長共通部分列に基づく指標ということができる。しかし、例えば、1文字ずつ2カ所合致した場合と連続した2文字が1カ所一致した場合とを比べると、同じ2文字の一致であっても、後者により高いスコアを与えたい。そこで、細切れに一致した場合のスコアを下げるために、一致した文字列1カ所につき、ペナルティとして0.9点を減点することとした*5。つまり、7文字一致した場合には $7-0.9=6.1$ 点、1句中に文字一致する部分が2カ所あった場合には $6-0.9 \times 2=4.2$ 点、というように点数を付け、5句すべての点数を合計するのである。なお、ここでは、文

字の一致を考える際に重複は許さず、また、句内における文字列の順序の反転は考慮していない。一例を示そう。

SIM = 17.4
 271227 七巻 41為忠 185
 人しれず/おもふこころを/君にさは
 /おぼろにうつせ/春の月かげ/
 134619 四巻 19俊成女 68
 うらめしや/思ふ心を/かすめても
 /おぼろにうつす/春の月影/
 [ひとしれす][うらめしや] 0.1
 [おもふこころを][おもふこころを] 6.1
 [きみにさは][かすめても] 0
 [おほろにうつせ][おほろにうつす] 5.1
 [はるのつきかけ][はるのつきかけ] 6.1

第2句と結句は7文字すべてが一致するので各6.1点、第4句は6文字が一致して5.1点、そして初句は、偶然「し」1文字を双方が含んでいたので0.1点、残りの第3句は、同じ文字が全くないので0点ということになる。合計17.4点である。

ここで算出される点数は、あくまでも機械的な処理の結果であって、1点2点の差が、そのまま歌の類似度の違いを示すわけではないことは、言うまでもない。そもそも、類似性の尺度自体、唯一存在するというものではあるまい。つまり、ここで用いようとしているのは、既存の歌の表現(文字列)をそのまま採り入れた歌が、『為忠集』中に多数存するという、これまでの研究成果を踏まえ、『為忠集』と共通文字列をもつ歌を多く収載する歌集がどれか、目算をつけるための手法のひとつに過ぎない。

4 類似歌抽出の結果

『為忠集』と比較した歌集は、全155集、のべ105,609首である。

○『新編国歌大観』第三巻

125西行~134拾員外(10集, 17,639首)

*4この点について、詳しくは、竹田正幸、福田智子、南里一郎、山崎真由美、玉利公一「和歌データからの類似歌発見」(『統計数理』, 2000年, 受理印刷中)に述べている。

*5ペナルティの値の決定については、上記文献を参照されたい。

	12.0未満	12.0～	13.0～	14.0～	15.0～	16.0～	17.0～	18.0～	19.0～	20.0～
山家	417486	1	1	0	0	0	0	0	0	0
拾玉	1558315	1	1	0	0	0	0	0	0	0
拾遺愚	802425	0	1	0	0	1	0	0	0	0
長方	57834	1	0	0	0	0	0	0	0	0
隆信	253935	1	0	0	0	0	0	0	0	0
金槐	193410	1	0	0	0	0	0	0	0	0
俊成女	64820	1	2	3	2	0	1	0	0	0
隆祐	91997	1	0	0	0	0	0	0	0	0
兼好	76395	0	0	0	0	1	0	0	0	0
草庵	388973	1	0	0	0	0	0	0	0	0
光経	167586	1	0	0	0	0	0	0	0	0
実材母	238602	1	0	0	0	0	0	0	0	0
中院	56489	0	1	0	0	0	0	0	0	0
前典厩	51109	1	0	0	0	0	0	0	0	0
蓮愉	186954	1	0	0	0	0	0	0	0	0
隣女	704240	1	1	0	0	0	0	0	0	0
龜山院	87692	1	0	0	1	0	0	0	0	0
伏見院	637798	1	0	0	0	0	0	0	0	0
俊光	162475	1	0	0	0	0	0	0	0	0
藤谷	85003	0	0	1	0	0	0	0	0	0
李花	245058	1	0	0	0	0	0	0	0	0
沙玉1	79892	1	0	0	0	0	0	0	0	0
草根	2862959	2	3	1	1	0	0	0	0	1
常縁	108137	1	0	0	0	0	0	0	0	0
基佐	79888	3	1	0	0	0	0	0	0	1
松下	871288	1	2	0	0	0	0	0	0	0
卑懐	197176	1	0	0	0	0	0	0	0	0
雪玉	2203109	1	0	0	0	0	0	0	0	0
通勝	366646	1	0	0	0	0	0	0	0	0
すべて	28445350	8	13	5	4	2	1	0	0	2

- 『新編国歌大観』第四巻
1式子～25慕景(25集, 11, 373首)
- 『新編国歌大観』第七巻
66小侍従～145為重(80集, 32, 948首)
- 『新編国歌大観』第八巻
1雅世～40惺窩(40集, 43, 649首)

これで、『新編国歌大観』所収の私家集のうち、平安最末期から近世に至るまでの集を、ほぼ網羅することになる。

その結果、類似度が12点以上の歌の対が得られた歌集とその歌数を、上の表に示す。この表を見

ると、注目すべき数値を示す家集が二つある。その一つは、室町時代の歌人、正徹の『草根集』である。12点台から15点台の間に7首というのは、『俊成卿女集』に次ぐ用例の多さであり、20点台が1首あるというのも、我々の目を引く。

そこで、この『草根集』と『為忠集』との間で、共通文字列をもつ歌を具体的に調べてみたところ、以下の10対の歌は、傍線を付した部分が共通文字列であり、それが互いの緊密な類似性を示している。

- (1) さとびとは/やまだのくろに/しめはへて

- /とりしきなへを/まづたむけり
 『為忠集』45番
- たつたみも/やまだのくろの/やしるとや
 /とりしきなへを/たむけてはゆく
 『草根集』2341番
- (2) ゆふだちの/くもかぜさわぐ/をりからに
 /こゑのせみも/こゑしきるなり
 『為忠集』95番
 にはかなる/なつのあめかぜ/くもりきて
 /こゑのかはづ/こゑしきるなり
 『草根集』3081番
- (3) あきもはや/すゑのおちばに/まつむしの
 /こゑうづもる/のべのあはれさ
 『為忠集』117番
 あきながら/おちばもしらぬ/まつむしの
 /こゑうづもる/のべのはつしも
 『草根集』3528番
- (4) おとづる/まきのいたどに/おとあらし
 /しぐれぞふゆの/はじめとはしる
 『為忠集』149番
 ひきたつる/まきのいたども/とほるやと
 /うつおとあらし/ゆふだちのかぜ
 『草根集』2596番
- (5) あはれなり/みなとがはらは/ふゆがれに
 /のこるますげも/こほりしめけり
 『為忠集』163番
 かぜわたる/そがのかはらの/ふゆがれに
 /のこるますげも/つゆこほりつつ
 『草根集』5122番
- (6) ゆきつめど/とばのかよひち/みちぞある
 /ひまなくやりし/をぐるまのあと
 『為忠集』170番
 うづめども/よどのゆきに/みちぞある
 /あかつきありし/をぐるまのあと
 『草根集』6027番
- (7) そでさむし/たなかのもりの/つじやしる
 /ほたきをはやす/こゑきほふらん
 『為忠集』173番
- そでさむし/みちゆきぶりの/つじやしる
 /ほたきのあとの/もりのこがらし
 『草根集』6320番
- (8) たなばたの/ふねまちかねて/あまのがは
 /きしのこなたに/くものひれふる
 『為忠集』235番
 くるよの/ふねまちかねて/たなばたの
 /くものひれふる/あまのかはぎし
 『草根集』3377番
- (9) ひととせに/ひとよといへど/むかしより
 /ちぎりたえせぬ/ほしあひのそら
 『為忠集』236番
 あまのがは/ながれそめにし/むかしより
 /ちぎりぞたえぬ/ほしあひのそら
 『草根集』3433番
- (10) まつたてる/ちとせのやどり/あるとみて
 /くもおしのきて/おるひなづる
 『為忠集』260番
 まつたてる/ちとせのやどの/ありとみて
 /くもあつるぞ/ここにおりぬる
 『草根集』8986番

たとえば(3)では、「あき」「おちば」という語に加え、第3句以下「まつむしの/こゑうづもる/のべの…」が一致する。また(5)は、「みなとがはら」と「そがのかはら」がともに地名であり、第3、4句「ふゆがれに/のこるますげも」、結句の「こほり」が共通する。そして(6)は、「ゆき」が一致し、さらに第3句以下「みちぞある/…りし/をぐるまのあと」が同じである上、初句が双方「ゆきつめど」と「うづめども」で、逆接の確定条件である。さらに(8)では、『為忠集』の第2句「ふねまちかねて」だけは、『草根集』でも同じく第2句に位置するが、初句「たなばたの」は、『草根集』では第3句に、また、結句「くものひれふる」は第4句に、といった句の入れ替えが見て取れる。加えて、『為忠集』の第3句「あまのがは」は、『草根集』の結句「あまのかはぎし」に、文字列が包含されるため、その結果、この(8)が、類似度最高値の20.5点であった。

ここで重要なのは、このような表現をもつ歌が、先の俊成卿女の歌の場合と同様、他に見当たらない

いということであろう。つまり、上に挙げた『為忠集』歌と『草根集』歌の対は、どちらか一方がもう一方の本歌であるという、直接的な影響関係にあると見做されるのである。

5 成立年代推定

それでは、『為忠集』歌が『草根集』歌の本歌になったのであろうか。それとも、その逆なのか。仮に、「為忠」が正徹の歌の表現を採ったとするならば、「為忠」は、少なくとも正徹と同時代以降の歌人ということになる。そこで、前節に掲げた表を再度見てみると、先ほど採り上げた『草根集』と同じ、20点台の歌をもつ私家集が、もうひとつある。『基佐集』である。次に、その『基佐集』において最高の20.5点であった歌の対を示す。

よのなかの/はかなきことは/あさがほの
 /ただひととき/しらせてしかな
 『為忠集』114番
 よのなかの/はかなきことは/あさがほの
 /ただひとときの/はなとしらずや
 『基佐集』121番

『基佐集』の作者、桜井基佐は、康正3年(1457年)に、『武家歌合』に出詠している歌人で、なんと、先の正徹の弟子である。上に挙げた『為忠集』と『基佐集』の歌は、5句中4句までがほぼ一致し、歌の意味も大差ないことから、本来、同一歌であったと見做され、しかも、この1首を含む一連の歌群は、下の表のように、その歌題が一致するのである。ここでは冒頭の一部省略したが、この歌群のはじめには、それぞれ、比較的長い詞書(詠歌状況の説明)が記されている。それによると、僧から来訪の誘いを受け、出向いていった先で、早朝、朝顔の花が咲いている場面に遭遇したといういきさつが、『為忠集』と『基佐集』とで全く同じである。つまり、この歌群冒頭は、歌のみならず、詠歌状況までが共通することになる。そして、『為忠集』では、冒頭の朝顔の歌(114番)の次に、「おなじこころを」という詞書と、115番歌が続く。一方、『基佐集』の方は、朝顔の歌(121番)に対する、屋敷の主の返歌(122番)が載る。この『為忠集』115番と『基佐集』122番の歌の本文を比較すると、冒頭の朝顔の歌の場合と異なり、それぞれ別の歌と考えざるを得ないが、「朝顔の/花見てだにも」という句が共通する。これはおそら

『為忠集』	『基佐集』
<p>……にしのかたをみをれば、あさがほのあ さまだきより露ふかくさきいでければ、よ めりける 世中の はかなき事は あさがほの ただひととき しらせてしかな(114番)</p> <p>おなじこころを あると見れば そのままきゆる 朝がほの 花みてだにも しる人ぞなき(115番) 女房ゑもんのかみ、草むらの虫をよめりけ る 秋ののの 草むらごとになくむしの かれふとともに 声かはりゆく(116番)</p>	<p>……夜明けければ庭にいでて見けるに、ま がきにあさがほの花うるはしく咲きみだる るを見て、すずりをよせてかくよみ侍り 世の中の はかなき事は 朝顔の ただ一時の 花としらずや(121番) といひ侍れば、あるじききて、返しとおも ひて 朝がほの 花見てだにも 知らぬ身は 何にかならむ 猶ぞはかなき(122番)</p> <p>又、草むらの虫を 住みあらず 秋の千草の かれふより かれがれならし 虫のねぞうき(123番) おなじこころを 秋更けて 虫の音茂き 草の原 いかに夜寒の 風や身にしむ(124番)</p>

『為忠集』	『基佐集』
逐夜増恋 恋ひそめて 夜毎に夢も みしかども いまはいほどに ねられざりけり(179番) 待不来恋 契りおく いもを今やと まちぬれば 更けゆくかねの ねずぞあけける(180番) 女ばうすけ、雨中増恋といふことをよみ待 りける 君こふと おもひくらせる よるの雨は 人しれずしも 袖ぞぬれぬる(181番)	逐夜増恋 君をのみ 思へば夢も みしかども 今はねをだに ねらばぞあらん(199番) 待不来恋 待ちわびて 妹がすみかを 尋ぬれば あぶくま川の あなたなりけり(200番) 雨中増恋 君こひて ながめがちなる 雨の夜は かたしく袖に かこちてぞぬる(201番)

く、この2首の歌が、同じ機会に同じ場所で詠まれたため、どちらかが、もう一方の歌の表現をまねたのであろう。つまり、冒頭の朝顔の歌が詠歌のきっかけとなり、そこに集っていた複数の歌人たちが、思い思いに口ずさんだ歌の中から、『為忠集』と『基佐集』は、それぞれの視点で、歌を選択して載せたように見受けられるのである。そしてさらに、『基佐集』123番の詞書に「又(また)」とあることから、朝顔の歌が詠まれた場において、引き続き「草むらの虫」の歌(123番)が詠まれたと考えられるが、果たして、『為忠集』も、次の116番は「草むらの虫」という題である。ということは、この題の歌までは、冒頭の朝顔の歌と同時に詠まれたと見てよいだろう。なお、『為忠集』116番歌の作者は、「女房ももんのかみ」と明記されているので、この場に集った歌人は、僧の他に、女房もいたことがわかる。このように読んでくると、為忠と基佐の交友範囲が共通していたことが、想定し得るのである。

為忠と基佐との交友圏の重なりを窺わせる歌群は、他にも見出せる。たとえば、上の表に示した歌群では、「逐夜増恋」「待不来恋」「雨中増恋」という結題が三つ、『為忠集』と『基佐集』とで、順序まで完全に一致する。『新編国歌大観』を検索しても、これらの歌題がこの順にまとまって配されている箇所は他になく、この歌群がありふれたものではないことがわかる。とすれば、ここにも、為忠と基佐との接点を求めることが可能であろう。ちなみに、『為忠集』181番には、「すけ」

という女房が登場するので、ここでも先の歌群と同様、歌会のようなかたちで、為忠や基佐の他、女房らが集っていたようである。

以上、考察してきたような、『為忠集』と『基佐集』とのきわめて緊密な歌群の共通性から考えれば、『為忠集』『基佐集』の作者、為忠と基佐が、同じ時代の、同じ文化圏に属する歌人である可能性を、否定し去ることはできないだろう。

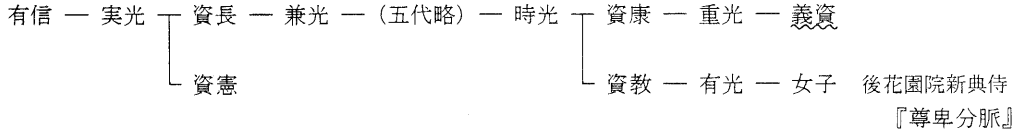
6 仮説の傍証

「為忠」を15世紀の歌人と想定すると、これまで未詳とされてきた『為忠集』の詞書に登場する人物の出自を、いくらか明らかにすることができる。ここではまず、「三位よしすけ」を紹介しよう。

三位よしすけの家にて、かんだちめ殿上人よりて歌よみはんべりけるに、恋の十首の中に

おもひかけて いはんもつらし 玉の緒の
 あはずはなげの ころもばかりを
 『為忠集』203番

「三位」になった「よしすけ」という人物を『公卿補任』によって検すると、藤原義資という人物が浮かび上がる。義資は、応永26年(1419年)4月10日に参議正四位上となり、永享6年(1434年)6月9日、権中納言正三位で薨じた。永享6年(1434年)2



月には、足利義教の子、義勝の誕生によって、足利將軍家の外戚としての権力をつかみかけるが、そのわずか4ヶ月後、邸に侵入した盗人により殺害されたという。享年38歳(『公卿補任』)。さて、彼は、公卿となった応永26年に従三位となり(12月5日)、それから亡くなるまでの15年間、ずっと三位であった。為忠が、義資宅における上達部・殿上人の歌会に参上したのは、この間のことであると推察される。

ちなみに、この義資のまたいとこに「後花園院新典侍」がいるが、この人物は、次の歌に登場する「女ぼうしんすけ」であろう。

夏のせみといふ事を、女ぼうしんすけ、
よみ侍りける
夕だちの 雲風さわぐ をりからに
木ずゑのせみも こゑしきるなり
『為忠集』95番

これまで、「三位よしすけ」が『為忠集』の成立年代の決め手として注目されるに至らなかったのは、やはり、この家集が当初、平安末期の大原三寂の父「為忠」の集に比定されてしまったことにあるように思われる。後に、鎌倉中期頃に成立を引き下げる説が出て、この一人の歌人の人物考証をするにあたり、その調査範囲を室町期にまで広げてみようという発想は、案外、もちにくいものである。計算機による類似歌発見は、このような研究の盲点を、我々に気付かせてくれたと言える。

7 おわりに

『為忠集』に見える次の歌は、これまで、助動詞「た」の比較的古い用例とされてきた*6。

帰雁
とききぬと 古郷さして かへる雁
こぞきた*7みちへ またむかふなり
『為忠集』18番

だが、これまで述べてきたように、『為忠集』が室町期の私家集であることが明らかになった以上、今後、この用例の扱いをめぐる、概説書や事典類の書き換えも行われなければならないであろう。

室町時代の「為忠」という歌人については、今のところ、『為忠集』以外の手がかりはなく、従って、出自さえ未詳という他はない。とはいえ、既存の歌の表現をそっくり採り入れた歌を多く収載するという、『為忠集』の特色を利用し、その成立を15世紀に特定できたことは、一応の成果と言えるであろう。しかも、その年代推定に要した日数は、わずか3日であった。それというのも、個々の『為忠集』歌と類似する表現をもつ歌を捜す際に、計算機を用いることで用例収集の労力を減らし、その分、抽出された用例の考察に時間を費やすことができたためであろう。だが一方、計算機が結果を次々と提示するため、それらを吟味する人間の疲労は、かなりなものとなる。今後は、こういった点を考慮しつつ、うまく計算機とつきあいながら研究を進める必要があるであろう。

*6『国語学研究事典』(佐藤喜代治氏編、明治書院、昭和52年11月)「過去・完了の助動詞」の項(佐藤武義氏)、『研究資料日本文法』7(明治書院、明治書院、昭和60年11月)「た」の項(岡本勲氏)、63~64頁、岩波講座『日本文学史』第4巻変革期の文学I(久保田淳氏他編、岩波書店、1996年3月)「古代語から中世語へ」(山口明德氏)など。
*7「北」と「来た」との掛詞になっている。